

赤い文化住宅の初子

2007(平成19)年4月26日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・脚本＝タナダユキ／原作＝松田洋子『赤い文化住宅の初子』(太田出版刊)／出演＝東亜優／塩谷瞬／佐野和真／坂井真紀／桐谷美玲／諏訪太郎／江口のりこ／鈴木慶一／鈴木砂羽／浅田美代子／大杉漣(スローラーナー配給／2007年日本映画／100分)

第3章

ヒロインの個性・職業も千差万別

……たかが少女マンガ、と侮ることなかれ！ 松田洋子の原作コミックを映画化した若手女流監督タナダユキの女を描く視点はたしかで、ただ者ではない！ 格差、格差の大合唱には賛同できない私だが、中3生のこんな平成貧乏物語には唖然……？ 初子が風俗にも新興宗教にも走らなかつたのは、なぜ……？ 今ドキの多くの甘チャンたちは、こんな極貧状態でも新しい旅立ちがあることや、初子の生き方をしっかりと学んでほしいものだが……？

■平成版貧乏物語は……？

『ALWAYS 三丁目の夕日』の続編の企画がスタートするなど、今昭和30年代を懐かしむ映画が1つのブームになっているが、平成の世も20年近くになれば、絶対的な貧乏物語は過去のものになったはず……。そう思っていた私だが、最近では格差社会が叫ばれ、生活保護の受給資格が制限されたという事件まで起きている。そんな時代状況の中、この映画が始まると、やはり平成版貧乏物語はあったんだとすぐに気づかされ、思わず身を乗り出していくことに……。

時給500円のアルバイト料を、中学生だからということさらに値切られ、600円の昼食代を、300円ずつにしようか、それともお兄ちゃんを400円、私の分を200円で我慢しようかと悩んでいる中学3年生の主人公初子(東亜優)の姿を見ていると、思わず涙ぐみそうに……。

異色新鋭女流監督が描く、ケツタイな女先生像は……？

本作が初監督作品ながら、タナダユキ監督はただ者ではない！ そのことは、初子の担任である田尻先生の描き方を見ればよくわかる……？ タナダユキ監督は坂井真紀のような美人女優をこの役に起用したが、この田尻先生はどうしようもない最悪の先生……？ 授業はまるでやる気なし、進路指導中も出会い系メールのチェックで忙しそう、そして挙げ句の果ては、生徒を風俗店や援助交際に突き出す一歩手前まで……？

こんな先生がいるから、生徒たちの学力の低下はもとより、あまりにもひどい行儀の悪さになっているのだ、と思うものの、一方ではこの先生も意外に本音で生きているのかも……？ したがって、初子に対して吐く、「あんた、いつも誰かが助けてくれるいうて思うとるじゃろ」というセリフは、多少きつすぎる面はあるものの、一見やさしそうでもともそうで無責任な先生には、とても言えないセリフ……？

そう考えてみると、こんなケツタイな女先生像をスクリーン上に表現した、異色新鋭女流監督の経歴にも注目しなければ……。そう思ってプレスシートを読むと、1975年生まれ彼女は、近時蜷川実花監督の『さくらん』(07年)の脚本を手がけた他、「本当に映画にしたいものしか撮りたくない」というスタンスの持ち主らしいから、その主義・主張がかなり明確なのは当然。私はこんな監督が大好きだが……。

こんな面白い純情恋愛コミックなら……

この映画の原作は、松田洋子が描いた『赤い文化住宅の初子』。もちろん、私は全然知らなかったが、1964年生まれの松田洋子は30歳から漫画家を目指し、1995年にデビューした注目の漫画家らしい。広島弁といえば、かつての東映の実録ヤクザ路線を思い出すが、この『赤い文化住宅の初子』が広島弁丸出しのコミックとなっているのは、松田洋子が広島出身だから……。

少女マンガなどハナから興味のない私だが、この映画を観る限り、この原作コミックの主張の明確さと強さにビックリ……。こんな面白い純情恋愛コミックな

ら、是非一度読んでみたいと思ったほど……。

今ドキの中学3年生は……？

教育の荒廃、言葉遣いの乱れ、異性交渉の低年齢化そして経済格差と教育格差の広がり、無能・無責任教師の増大 etc、今ドキの中学3年生の教育現場は最悪……？ そんな中、東高に進学すると決めているのは秀才らしい三島クン（佐野和真）だが、初子は今なお進学か就職か迷っている様子。昭和30年代の高度経済成長期の日本では、中卒の労働力は「金の卵」ともてはやされ、就職列車に乗って都会へと集中していったが、今は中卒就職はマレ。もっとも、初子は決して就職したいわけではなく、ホントは東高に行きたいのだが、そこらあたりの事情は、幼い三島クンにはまだわからない様子……？

この中学校には、田尻先生のようなケツタイでどうしようもない教師がいるものの、全体としてはごく平凡で標準的な学校のように……。そのため、授業風景や休み時間の過ごし方を見ても荒廃感はないが、さてこれは、タナダユキ監督の体験談……？

君は「文化住宅」ってわかる……？

私の大学時代は、マンションという呼び方の近代的ビルは少なく、2階建ての文化住宅が身近な存在だった。とくに大阪大学法学部のあった石橋キャンパスへ通う阪急宝塚線の梅田—石橋間はそう。日本人は言葉の遣い方が巧みだから、文化アパートとちょっとカッコいいネーミングをしたものの、実はその実態は今で言えば密集市街地にある不良老朽木造アパートのこと……。

ところで、今初子と同世代の女の子（14、5歳）がこの映画を観ても、文化住宅という言葉自体を知らないはず……？ ちなみに、文化住宅が1番よく似合っていたのは、「昭和貧乏物語」の代表曲『昭和枯れすすき』をテーマ曲とし、高橋英樹と秋吉久美子が主演した結城昌治監督の『昭和枯れすすき』（75年）（『シネマルーム10』55頁参照）……。

文化住宅に住むのは……？

昭和貧乏物語である『昭和枯れすすき』でも、文化住宅に住むのは両親のいない兄と妹の2人だったが、この平成貧乏物語の映画もそれは同じ。すなわち、父（大杉漣）は蒸発してしまい、母爽子（鈴木砂羽）もその後働きづめの中死亡してしまったため、今は高校を中退して働いている兄克人（塩谷瞬）とその妹の初子の2人。『昭和枯れすすき』では、刑事としてしっかり働いている妹思いの兄と、不良っぽい妹という組み合わせだったが、この映画の兄克人は、今鉄工所のようなところで働いているが、かなり気持は荒んでいる様子。したがって、妹に対しても全然やさしさは感じられず、「何でも俺が世話してくれると思うなよ」と冷たいセリフを吐くため、初子は高校に行きたいという願いを口に出せないまま……。そのうえ、いつもイライラしているこんな克人の荒れた精神状態では、仕事先でいつ、どんなトラブルになるかわからない感じで心配……。そんな兄の様子を見ていた初子は、結局昼食代を克人に400円、自分に200円と振り分けていたが……？

「カネ、カネ、カネ……」 vs. 「同情するなら金をくれ」

今はすっかり大人の女優になり子供まで産んだ安達祐実が、少女時代に主演した『家なき子』における有名なセリフが「同情するなら金をくれ……」。この映画の冒頭、中華料理屋のおやじ（鈴木慶一）からバイト料を値切られ、「カネ、カネ、カネ……」とつぶやきながら1人トボトボと家に向かうシーンは、安達祐実ほどのインパクトはないが、やはり衝撃的……。

かわいい盛りで、あらゆる可能性をもち、何でもチャレンジできる中3生という時代に、こんなセリフをつぶやかなければならないのは、初子が悪いのではなく、社会が悪いことははっきりしている。もし私が個人的にこんな初子の状態を知ったら、安っぽい同情やヘンな下心からではなく、純粋に中3生の可能性を応援するという意味で、きっと私的奨学金として坂和ファンドを立ちあげているはずだが、世の中にはそんなうまいめぐり合わせはなかなかないもの……。

よくぞ風俗にも新興宗教にも走らなかったもの……

高校中退の克人は男だから使い途が狭く、せいぜい単純労働、肉体労働に就くしかないが、平成の世も20年近くになった今ドキのニッポンでは、初子くらいの標準以上の美貌があれば当然、あるいは標準以下であっても中3生の女の子という若さがあれば、風俗の道がいくらでもあるもの……。もちろん、それは初子自身がわかっており、時々幻想のように初子の頭の中に現れる風景を見れば、初子だって時々その誘惑に駆られていることがよくわかる。1度その決心をすれば、楽にたくさんのお金を稼ぐことは十分可能……？

また世の中には、初子のような世の中の正規システムからの落ちこぼれ組を意識的に誘っていき新興宗教がたくさんある。現にこの映画に登場する浅田美代子扮する栄子さんのやさしさをみれば、『釣りバカ』シリーズでの人の良い奥サマぶりが知れ渡っているだけに(?)、中3生の女の子ならコロリとはまってしまいそう……。また、この映画には登場しないが、男の子の場合はヤクザの下っ端として拾われる可能性も十分ある。したがって、こんな苦しい境遇にありながら、初子が風俗へも新興宗教へも、ましてやヤクザ組織にも走らなかったのは立派。しかして、初子の心の支えになったものは一体ナニ……？

三島クンの存在と彼との最初の約束は……？

三島クンと交わっていた最初の約束は一緒に東高に行くこと。そのため塾のない日、彼は初子に勉強を教えてくれていた……。しかしある日、栄子さんが初子の手渡ししてくれた5000円札で1度は高校入試の参考書を買ったものの、「俺は高校中退じゃ言うんに、お前は進学校に行ってどうする気なんじゃ!」と冷たく言い放つ克人の言葉を聞き、初子はせっかく買った参考書を海に放り棄ててしまうことに……。約束を守れなくなったことを三島クンに伝えたものの、初子の説明の不十分さもあって事情がよくわからない彼は怒ってしまった。しかし、田尻先生から、初子は就職組に決まったと聞いた三島クンは、はじめて初子の文化住宅を訪れることに。そこで展開される2人の中3生の話し合いと一騒動(?)についてのタナダユキ監督の描き方は絶品!

『赤毛のアン』のナゾと究極の約束とは……？

2人の話し合いの小道具となり、話の糸口になるのが、モンゴメリー作、村岡花子訳による『赤毛のアン』。普通、女の子はこの物語が大好きなはずだが、なぜか初子はこれが大嫌い。ところがそれにもかかわらず、これは初子にとって手離すことのできない大切な本。さて、それはなぜ……？　ここらあたりの少女の気持の描き方は、やはり新進女流監督ならではのもので、男の監督では到底できないはず……？

初子にはこんな三島クンの存在が大きな心の支えになっていたことは確実だから、その意味でこの三島クンの貢献はきわめて大。さらに、ある日の田尻先生を巻き込んだトラブルや、風邪をひいた初子への三島クンからの赤いマフラーのプレゼントなどいくつかの展開を経て、卒業式の日、三島クンと初子が交わす究極の約束とは……？

「約束」という言葉がいかにも薄っぺらくなっている今のニッポンにおいて、中3生の2人が小指をしっかりと絡ませた究極の約束の重みは……？

今頃父親が登場しても……？

さあ、タナダユキ監督はこの映画をどんなエンディングにもっていくのだろう、と興味深く見つめていると、季節は冬を過ぎ、卒業式も終わり、今初子はビスケット工場で働いていた。そして、高校へ通う三島クンとは時々公園でデートしている様子。ままごのような2人の恋は順調に進んでいるようなので安心していると、ここで全く予想もしなかった突飛な事態が……。

それは、道路上でごみ箱を漁っていたホームレスから、いきなり「お前初子じゃろ」と声をかけられたこと……。ビックリした初子は急いで文化住宅へ逃げ帰ったが、それをつけてきたらしい父親は、ドアをノックし、「初子、いるんじゃろ」とさらに声をかけてきた。その声を聞いた克人は、母親と幼い兄妹を見捨てて蒸発してしまった父親を激しく責めて追い出してしまったが、それは克人の精神状態からすれば当然。

ちなみに、弁護士の私の目から見れば、生活保護の申請を含めて何かいい方法

はないのかとつい思ってしまっただが、それはあくまで傍論……？

この映画のタイトルに「赤い」という形容詞がついているのはなぜなのか、きっとあなたもわからないはずだが、父親登場の後、やっとその意味がわかるから、そこに注目を……。

今、新しい旅立ちだが……

今日は克人が大阪へ引っ越すと決めた日。なぜ兄妹の2人が引っ越すことになったのかは、カンのいいあなたなら、この評論を読めば想像がつくはず……？ 小さな駅で列車の到着を待っていた克人と初子の前に、高校の模擬試験から抜け出してきた三島クンが見送りのために駆けつけてきたのは立派。これくらい初子に対して律儀なら、これからも彼は信用できそう……？ ちなみに、韓流純愛ドラマなら、すぐ傍に兄克人がいるという設定にしないはず……？ また、三島クンと初子との別れにもそれなりの色をつけるはず……？

それに対して、タナダユキ監督がこの2人の別れに用意したしゃれたセリフと小道具は……？ 書いておかなければ私自身が忘れてしまうため、ネタばらしになることを覚悟であえて書けば、その小道具はもちろん『赤毛のアン』の絵本。なぜ初子が今それを持っていないのかは、あなたのご想像どおり……？ そして、「恋愛ドラマの最終回みたいだが」と涙ぐむ初子に対して、三島クンが述べるこの映画1番の気の利いたセリフは「わしら家族んなってホームドラマするんじゃ」という大人びたもの。子供のようだった中3生から高1になると、こんなにしっかりした男の子に成長したのかと感心。これなら若い2人の間の究極の約束もカラ手形になることはなさそう、とおじさんはひと安心したが……。

UA が書き下ろした新曲は……？

私がUAの名前をはじめて知ったのは、今から11年前の1996年に発売された『雲がちぎれる時』を聴いた時から。実力派女性歌手の歌の構成力と歌唱力に感心したもの。それと同じ1996年の面白い映画が岩井俊二監督の『スワロウテイル』で、この映画の主題曲を歌った「CHARA」と共に今でもよく覚えている。何回かカラオケでも両曲にチャレンジしたが、サマになるのはやっぱりムリだっ

た……？

そんなUAがこの映画を観て、自分自身が作詞を手がけた新曲が『Moor』とのこと。最近の映画は、エンディングの字幕が流れる中で主題曲が流れることが多いが、この映画もそのスタイル。切ない初子の物語が終わった後、静かに流れてくるその歌は聴きごたえ十分。

最近は映画鑑賞のマナーの悪い奴が多く、スクリーンがいったん暗くなりエンドロールが流れ始めると、たちまちケイタイの液晶が光ったり、平気で立ち上がりながらコートを着ようとする輩が多い。しかし、この映画を観たあなたは決してそんなことをしないで、この『Moor』の最後の歌詞までじっくりとかみしめながら、この映画のそして初子の切なさを再度確認してもらいたいものだが……。

2007(平成19)年5月1日記



©2007 松田洋子・太田出版／『赤い文化住宅の初子』フィルムパートナーズ